

感覚動詞のとり構文について

淀縄 義男

1. 感覚動詞(知覚動詞) feel, hear, see, notice, observe, watch, look at, listen to, smell, perceive, spot等が主なものであるが、学習参考書としては see, to hear を使ってこれら感覚動詞のとり構文について、次のような例を示すのが一般的である。

例. I heard her mutter strange words under her breath. ①

passive voice: She was heard to mutter strange words under her breath. ②

また、完結された動作を示すときは、原形不定詞を、進行中の動作を示すときには、現在分詞を目的語の次にとる。

例. I saw him cross [crossing] the road. ③

passive voice: He was seen to cross [crossing] the road. ④

2. 他方、次のような記述をし、問題を引き起こしているものもある。

例. I watched her go [going] out of the room. ⑤

passive voice: She was watched to go [going] out of the room. ⑥

しかし、⑥の文は非文である。

また、次のような文の変化も正しい文とはならないであろう。

例. The house was felt to shake. ⑦

『ランダムハウス英和大辞典』第2版、1994年第1刷 p.3066, watch v.t.の1を見ると次のような記述であり、まちがいを引き起こしている。

(→ to do は不可: 受身 be ~ed to do [doing] は可)
(下線部筆者)

3. このまちがいを引き起こした原因は、機械的に、感覚動詞、知覚動詞(hear, see, observe等)の動詞

を、watch, listen to, look at等においても受動態にしたためである。ではなぜ、watchやlisten to, look at等は受動態にできないのであろうか。次の記述を理解する必要がある。『現代英文法事典』三省堂から引用してみよう。

(4)知覚構文の受動態(PASSIVE)(特に、不可能な場合、が重要である。)

(b)知覚構文でも、用いられている知覚動詞によっては受動態が不可能なことがある。まず、「見る」というときに、seeは上で示したように、受動態が可能であるが、「意識的にじっと見る」ことを表すlook atやwatchは、次のように受動態が不可能である: *She was watched to go out of the room. (←They watched her go out of the room. (彼らは彼女が部屋を出るのを見ていた))。もちろん、watchを含む文がすべて受動態が不可能であるわけではない。

watchを主節動詞とする知覚構文の場合に受動態が不可能なのは、能動態と受動態の意味の違いによると考えることができる。つまり、知覚構文の受動態は偶然的なでき事を表すという理由によると考えられる。～seeという動詞が意図的に見るという意味と偶然に見かけるという意味が可能であるのと異なり、watchという動詞は、意図的に見るという意味だけが可能である。そうすると、watchの意味が要求する「意図性」と知覚構文の受動態が要求する「偶然性」が衝突するために、watchを主節動詞とする知覚構文の受動態は許されないということになる。

Declerck (1982) の著した *A Comprehensive Descriptive Grammar of English* (Kaitakusya, 1991) にある、次の文はどうであろうか。

Tom was watched playing the puppets by the children.

という文は、観察するという意味で、知覚構文の受動態が表す「偶然性」を意味しない場面が設定されなければならない。

4. ここで『詳解英文法事典』の Verb of Perception (知覚動詞) の関係箇所を引用してみよう。

身体的な知覚作用に関係のある動詞で、see, hear, feel はその代表的なものであるが、ほかに behold, notice, observe, watch などがある。～このような解説の後に、例として、I saw him run. I heard her sing. I felt the house shake. I noticed someone come in. I did not observe him leave the room. Watch the boy jump! を記述した後、それぞれの文に対する受動態を記述している。それらは次のようである。

He was seen to run. / She was heard to sing. / The house was felt to shake. / Someone was noticed to come in. / He was not observed to leave the house.

以上の例文で、The house was felt to shake. と Someone was noticed to come in. は問題としないのであろうか。かなり、しっかりした内容の文法書である。

5. 旺文社から出版されている『教師のためのロイヤル英文法』を p.123 で § 41. いろいろな受動態構文の記述を見てみると次のようである。

(1) 知覚動詞・使役動詞の受動態は、文型としては〈S + V + O + 原形不定詞〉の形で、〈S + V + O + C〉の第5文型と同じであるので、第5文型の変換の作業と同じようにすればよいが、ただし、受動態にするときには、原形不定詞が to 不定詞になってくることを注意したい。

《受動態にするときには、原形不定詞が to 不定詞になってくる、ということは、普通、動詞と動詞を結びつけるのには、to が必要であり、なんら特別なことではない。》

そして、次に記述されている内容については、学習参考書には、ほとんど触れられていないのである。
※知覚動詞、使役動詞ともに、すべてが受動態になるわけではないことに注意。

受動態にならない知覚動詞: watch, feel, (notice), listen to, look at

ここに挙げられた feel, (notice) は別として watch も、listen to も、look at も積極性がある。この積極性には、注目しておく必要がある。

6. 『教師のためのロイヤル英文法』p.144 に重要な点が記述されている。引用しよう。

受動態の be seen to, be heard to は、見せる [聞かせる] つもりはないのに、見られた [聞かれた] という意味を含む。有意志的な watch, look at, listen to などは、この構文では受動態には不適である。feel ほどははっきりはしていないが、一般に be seen [heard] の場合には、直接知覚ではなく、精神的知覚・理解を示していると解される。ただし、不定詞は to be 以外の一般動詞が可能である。さらに、受動態では、有意志的に見聞きするという動作の主体性を欠くため、時間的な継続性もない。 この意味でも、時間的に継続する watch は受動態に不適とされる。(下線部筆者)

そしてその後、参考となる文献を示している。

[Duffley 37-47, Verb 192-3, 198-200, 202-3; Kirsner 173-9]

学習参考書では、上記下線部の記述内容は案外意識して記述されてはいなく、この構文における受動態は、watch, look at のような動詞がなぜ受身形は不成立なのかという理由がわからなく、学習者は、問題を起こし、また、すぐ忘れてしまうことになる。

7. 『現代英文法総論』では、p.680 で、不定詞を扱い、ここで問題としている、微妙な点を指摘している。

2. ～ look at は ((米)) では不定詞節をとることはできるが、((英)) ではできない。

3. 知覚動詞が受動化された場合、不定詞に to をつけなければならない。

Nobody was seen to enter the lab after 5 o'clock.

Few of these patients are ever heard to say 'thank-you' to the nurses that care for them. しかしながら、このような受動態構文は、notice, listen to, watch, look at のような (静的知覚ではなく)、動的・積極的な知覚を表す動詞の場合には、不可能である。

The man was watched crossing [* to cross]

the street.

((米))用法, ((英))用法にも注目する必要はある。

8. 20世紀後半最大最良の英文法書といわれる *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Quirk et al.による Types of Verb Complementation (p.1207) を見てみよう。次のような内容でありおおいに参考となろう。

The passive with this pattern is regular:

We could *hear* the rain *splashing on the roof*.

~The rain could *be heard splashing on the roof*.

A teacher *caught* them *smoking in the playground*.

~They *were caught smoking in the playground* (by a teacher).

prepositional verbs with this type of complementation include *come across, come upon, listen to, and look at*: *Look at those children climbing the wall*. But these prepositional verbs have no prepositional passive: The

guards had been	}	searching
	}	
	}	
	}	
	}	

the building.

Have in this construction also has no passive, in keeping with its use in other constructions. She *had* us working day after day.

*We *were had* working day after day.

受動態において see, spot, watch, look at は、完全に O.K. なものを see, spot と判断し、watch は疑問であり、look at は非と判断されている。

9. ここで学習参考書を具体的に見てみよう。

(1) 『真島の英語200構文徹底講義』(1994年4月10日、第1版第1刷発行)

〔解説〕

a. be seen to do ~ 「~するのを見られる」

知覚動詞の受動態は、能動態と異なる点が2つある。1つは、能動態で原形をとっていたのが、受動態では to 不定詞になること。もう1つは、「偶然的

な知覚」。つまり思いがけず目撃された〔聞かれた〕というニュアンスがあること。

ここでの解説で、「偶然的な知覚」という表現内容は、大切なものである。この点が理解されないと、非文を作るということになる。

そして、注として次のような記述がある。

[注] すべての知覚動詞が受身にできるわけではなく、look at / watch / listen to などは、いわゆる知覚動詞の構文としては受身にできない。

以上の記述は、評価できるものである。

(2) 大学入試英語『上級者のための正誤問題の解法』(2001年1月25日初版第2刷発行) p.95 に230の解説がある。

230 D to go → go (または going) 「誰かが外に出た(または出て行く)のに気づきましたか」 notice + O + 原形 「O が…するの気づく」 (⇒ observe 221). notice の受動態は不可 × He *was noticed to go out*.

10. 『現代英文法総論』Renaat Declerck. 安井稔訳、開拓社 p.680 を見ると

The man *was watched crossing* [* to cross] the street.

という記述が見られる。そして、この例文の3行上より、次のような解説をしている。

~受動態構文は、notice, listen to, watch, look at のような(静的知覚ではなく)、動的・積極的な知覚を表す動詞の場合には、不可能である。

上記の例文において、to cross のような記述は、動的・積極的な意味を表していると判断しているようであり、crossing は状態的な動的・積極的な内容にはとらないのであろう。偶然性があるか、ないかの判断によるのであろう。この内容は『英語基本動詞事典』の watch の項目 p.1720 NB23 では、不定詞、現在分詞の両型とも非文として示している。

11. 〈新英文法選書3〉「補文の構造」、1989年2月15日初版発行

この補文の構造はシリーズの中の1つである。p.64 に次のような記述が見られる。

知覚に関する動詞でも、observe, notice は物理的知覚よりも思考や推論を伴う認識動詞として使われる。原形不定詞を伴う時は、他の場合と同様

に補部の述語が「完結」を表す(小西1980: 998).
(下線部筆者).

(113)a. I {observed / noticed} them {cheating
/ * cheat}.

b. I {observed / noticed} him leave the
house.

12. この小論で扱った感覚動詞のとり構文についてはわかり易く、『英語教師のための英文法』研究社出版で取り扱われている。そこでは、「意図的解釈」と「偶然的解釈」がそのカギを解くポイントである。参照されることを望むものである。

(茨城県立下館第一高等学校教諭)